

---

# お菓子の妖精は異世界旅行中

菊月 美琴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

お菓子の妖精は異世界旅行中

### 【Nコード】

N9728V

### 【作者名】

菊月 美琴

### 【あらすじ】

ある激しく雨の降る日に少女は青年と出会う。

”ネストル・ギルフォード”と名乗る彼は、

一風変わったパン屋で働く、お人好しな傭兵だった。

## ブログ first (前書き)

初めまして。

文才が崩壊している上更新頻度が低いですが、良ければ見て下さいね。

## プロローグ first

「桜、お疲れ様っ!」

「おわっ!」

教室を出ると、私の幼馴染兼親友の優璃が抱きついてきた。

優璃は私の隣のクラスで、いつも私のクラスより終礼が早く終わるので、こうしていつも廊下で待っていてくれる。

教室を出れば抱きつかれるのもいつものことだ。

「優璃もお疲れ様。嬉しそうだね、何か良いことあった?」

そう尋ねると、優璃は「よくぞ言ってくれた!」と言わんばかりの顔でこう言った。

「実はついさっきね、友達から美味しいケーキが売ってる店教えてもらったんだ!」

(美味しいケーキ……っ!)

「それは『行くしかないよね!』」

(おお、見事にハモった……)

「場所は何処なの?」

「この学校のすぐ近くだよ。最近開店したんだって」

「学校の近くかぁ……。本当に美味しいなら、行き着けのお店になるね」

「そうだね!確実に太るけど……」

優璃は苦笑して言った。

「うっ、確かに」

この前久しぶりに体重計に乗ったらちよっと危険な数値が出たので、これ以上太るのは避けたい。

「けど、甘い物への探求心が……」

私が思考していると、「そんな難しい顔しなくても……」という優璃の声が聞こえてきた。

「じゃあ、今回だけってことっ!」

「こっ、今回だけなら……」  
結局私は優璃の悪魔の囁きにより、ケーキを食べに行くことに決まった。

「着いたーっ！」

私と優璃は嬉しさのあまり、大声を上げた。

「結構お洒落なお店だね」

レンガ造りをイメージした外装は、外に飾ってある植木鉢や花鉢と良く調和していて、まるで絵本に出てくるような明るくて優しい雰囲気があった。

「そうだねっ。こういう家に住みたいなあ……」

優璃はうっとりとして店を眺めている。

「そういえば優璃はメルヘン大好きだもんね」

そう言うと、優璃は店から目を離さずに頷いた。

つい忘れてしまいがちだが、優璃はメルヘン大好きっ子なのだ。

それは幼い頃からずっとで、私と初めて出会った時にはもうすでになっっていたようだ。

優璃の部屋が童話の本でいっぱいだったり、私の家を初めて見た時に、優璃が「私この家の子供になるっ！」と駄々をこねたのが良い例である。

私は優璃の住む昔ながらの日本家屋も素敵だと思うのだが。

しかし優璃は自分がメルヘン大好きであるということは、学校の皆には秘密にしている。

理由は単純に恥ずかしいからだそうだ。

恥ずかしがることはないと思うが、確かにいまどきの高校生がメルヘンへの愛を声高らかに語っていれば、変人扱いされるのは目に見えていた。

「って、あっ！」

優璃が突然大声を上げた。

「如何したの？」

そう尋ねると、優璃は恥ずかしそうに顔を背けながら言った。

「店、入ろっか……」

(あっ、私も忘れてた……)

「お帰りなさいませ、お嬢様」

扉を開けると、メイド服のお姉さん達が出迎えてくれた。

周りを見渡せば大きなシャンデリアや絵画があり、まるで中世の貴族の館のような上品で豪華な雰囲気があった。

「こちらへどうぞ」

私と優璃はこの光景に一瞬戸惑ったが、メイドさんの案内に従ってとりあえず席に着くことにした。

「ご注文が決まりましたら、このベルでお呼び下さい」

そう言っつて小さな金のベルをテーブルに置くと、メイドさんは何処かへ行った。

「め……メイド喫茶だったんだ」

優璃は緊張しながら小さく呟いた。

「吃驚だよな。私メイド喫茶初めて来たよ」

苦笑して言っつと、優璃は「私も……」と言っつた。

「とりあえず何か頼もうか」

そう言っつと、優璃は「んー」と言っつてメニューを開いた。

「あ、これ美味しそう！」

優璃がそう言っつて指したのは、「ハート型ベリータルト」の写真。

可愛いハート型のタルト生地に、沢山の苺とブルーベリーが敷き詰められていて、その上には大きなハートが生クリームで描かれている。

私はその写真に胸が高鳴っつた。

「わあ、甘くて美味しそうだね！」

「でしょっ！500円だから値段も悪くないし……。メイド喫茶っつてもっと値段高いイメージだったんだけどな」

「確かに……」

この前テレビでメイド喫茶の特集がやっつていたが、値段が高すぎで行きたいとは思わなかつた。

しかし全部がそうというわけではないようだ。

「ねえ優璃、飲み物は頼む？」

「んー、良いや。最近金欠だし」

「分かつた。じゃあベル鳴らすね」

そう言っつと、優璃は慌てて「ま、待って！」と言っつた。

「如何したの？」

と尋ねると、優璃は少し照れながら「ベル、私が鳴らしても良い？」と言っつた。

一瞬「何で？」と思っつたが、成る程。優璃はメルヘン好きだから、こっつうのは好奇心がくすぐられるのだろう。

「良いよ。はい、どうぞ」

そう言つと、私は優璃にベルを渡した。

優璃は嬉しそうにベルを受け取ると、ベルを持っている右手を大きく振りかぶつて

チリンツ！ チリンツ！

小さな金のベルがけたたましく店内に鳴り響いた。

私は予想以上に大きな音と、優璃の妙な鳴らし方に啞然とした。

周りを見回せば、やはりお客さんもメイドさんも吃驚しすぎて固まっているようで、私は頭を抱えた。

「いつもいつも如何してこう……」

ぶつぶつと独り言を言っていると、何故か嬉しそうな優璃の声が聞こえてきた。

「何かつい……」

声のした方を見れば、薔薇色に頬を染めている優璃の達成感溢れる顔が見えた。

それはまるで、幼稚園児が親の絵を書いて親に見せた時のようである。

「もう……仕方がないなあ」

私が呆れ笑いしているとメイドさんがやって来たので、”ハート型ベリータルト”を二つ注文した。

## ブログ first (後書き)

今回はほのぼのしました。

余談ですが、桜ちゃんは優璃ちゃんが「私この家の子供になるっ！」と言った理由を聞くまでは、優璃ちゃんがメルヘン大好きなのを知らなかったようです。

## プロローグ *second* (前書き)

あらすじまで中々追いつきません……。  
ファンタジー要素が出るのはいつの日か……。

## ブローグ second

「『……！』」

私と優璃はテーブルの上の”ハート型ベリータルト”を早速口に運んだ。

その瞬間生クリームのおっさりした甘さと、苺とブルーベリーの甘酸っぱさ、そしてサクツとしたタルト生地の色味が口いっぱい広がった。

私と優璃はそのあまりの美味しさに頬が緩み、無我夢中で食べた。やがて食べ終わると、私と優璃は緩みきった顔で会計を済ませた。

「ふう……。美味しかったねっ！」

家への帰り道、優璃は上機嫌の様子で言った。

「うんっ！ あの美味しさは確実に癖になるよっ！ フランツ・ザツハーも吃驚だねっ！」

私は至極大真面目に言ったのだが、優璃はそれを聞いた途端に腹を抱えて笑い出した。

そして段々と息がしにくくなっているようで、優璃のやや釣り目の瞳には軽く涙が浮かんでいた。

こういう時にいつも優璃の笑いのツボが分からないと思う。

「えっと、とりあえず落ち着こうよ」

そう苦笑して言うと、優璃は頷いて大きく深呼吸した。

「落ち着いた？」

と尋ねると、優璃は「うん。なんとか」と陽気な笑顔で言った。

「ね、桜。またケーキ食べに行こうね！」

「もちろん。絶対だよ」

そう言うと、「うん。絶対だね」と優璃は優しく微笑んだ。

「あっ！ そういえば桜、渡したいものがあるんだけど……あ、あった！ はいっ！」

そう言うと、優璃は鞆の中から綺麗に包装された細長い箱を取り出して私に渡した。

「これは……プレゼント？ 何で？」

「何でって……今日誕生日でしょ？」

「あ、そういえばそうだね」

そう言うと、優璃は苦笑した。

「開けても良い？」

そう尋ねると、「良いよ！」と返事をされたので、早速箱の包装を解いて蓋を開けた。

すると中には、透き通った青色の宝石の首飾りが入っていた。

「わあ……、凄く綺麗だねっ！ でも高価そうに見えるんだけど……」

……

そう尋ねると、優璃は慌てて「あっ、えっと、その辺は気にしないでっ！ 桜に似合うと思って買ったのっ！」と言った。

（つまり高かったんだね……）

「ありがとう。この宝石はアクアマリン？」

「うん。石言葉は自由とか自信とか……。ね、それ付けてみて！」

「うん。ちょっと待ってね」

そう言って、私は箱からネックレスを取り出すと首に付けた。

「どう？ 似合ってるかな？」

「おお……。うん！ 凄く似合ってるよ！ それ買って良かった！」

「優璃、本当にありがとう。私これ大切にするね！」

そう言つて微笑むと、優璃は少し照れながら「そう言つてくれると嬉しいよ！」と言つて陽気に笑つた。

「じゃあ、またねっ！」

そう言つて、優璃は思い切り手を振つた。

話に夢中になつていて気がつかなかつたが、いつの間にか分かれ道に差し掛かつていたようだ。

「うん、またねっ！」

そう言つと、私は手を振り返して軽い足取りで家へ向かつた。

家へ向かつて数分後、家まで後数メートルというところでそれは降つてきた。

怒声が聞こえ、慌てて上を向くと大きな長方形のそれが目に入る。

それが鉄骨だと気がついた時にはすでに遅く、逃げる間も無く私は強い衝撃と共に意識を失つた。

## ブローグ second (後書き)

フランツ・ザッハーとはザッハトルテを考案した人で、ザッハトルテは別名”チョコレートケーキの王様”と言われています。私の大好きなケーキの内の一つです。おすすめですよ。

ブローグ third (前書き)

やっとブローグが終わりました……！

## プロローグ third

ふと気がつくと、私は椅子に座っていた。

周りを見渡せば大きなシャンデリアや絵画があり、まるで中世の貴族の館のような上品で豪華な雰囲気だ。今日訪れたメイド喫茶にそっくりだった。

唯一の相違点は、店員がメイドさんではなく執事さんだということだ。

(ここは……執事喫茶？ あれ、何で私ここに……)  
思索にふけっていると、「初めまして。藤瀬様」という声が聞こえてきた。

名前を呼ばれたのに驚きつつ声のした方を向くと、そこには執事さんがいた。

「は、初めまして。あの、何故私の名前を？」

「それは今日訪れる転生者の資料に、藤瀬様のお名前が書かれているからです」

「へ、転生者？」

戸惑いつつ尋ねると、執事さんは「順を追って説明致します」と言っただ。

「まず、私達は藤瀬様が今まで住んでいた世界をヴェロニカ、藤瀬様が今おられる世界をセレスティアと呼んでいます。藤瀬様は本日店内と同じ内装のタリアというメイド喫茶に行かれましたが、その店の商品には全てこの魂転生薬が混ざっています」

そう言って執事さんは、透明な液体の入った透明瓶を取り出した。

「この薬品は飲んだ方がお亡くなりになり魂だけの存在になられた際、その魂をセレスティアで転生させる効果があります。因みにこの薬品は転生後自然消滅しますので、その点にご安心下さい」

「えっと、質問です」

そう言っただ、私は右手をおすおすと挙げた。

「はい。何ですか」

「つまり、その……私は死んだということでしょうか？」

「はい。因みに資料には事故死と書かれていました」

「事故死ですか？ うーん……あ、そういえば帰宅途中に鉄骨が…

…」

そこまで言つて、私は血の気が引いた。

「あの、大丈夫ですか？」

執事さんは心配そうな顔をして言った。

「……はっ、大丈夫ですっ！ 続きの説明お願いします」

つい私は鉄骨の衝撃を思い出して戦慄してしまつた。

「分かりました。では続きを説明致します。先程私はこの薬品にはセレスティアで転生させる効果があるとお話ししましたが、これは一般的な転生を指してはいません。まず一般的な転生の場合ですが、死後は同じ世界で全く別の存在として転生します。つまり肉体や記憶や人格などが全て同一ではないということです。しかしこの薬品で転生した場合は違います。容姿は全く別の存在として転生しますが、記憶や人格などの内面的な部分と性別と年齢は前世のままです。またお亡くなりになる直前に身に付けていたものや持っていたものは、すべてコピーされ転生者と共にセレスティアに転移されます。そこに姿見鏡がありますからぜひ見てみてはいかがでしょうか？」

「はい。使わせて頂きます」

自分の容姿がどんな風に変つたのか興味があつた私は、淡いの期待を胸に椅子から立ち上がると姿見鏡の前に立つた。

見ると、姿見鏡の中には一人の美しい少女がいた。

長い睫とくつきりとした二重、大きくて爽やかな空色の瞳を持つ少女の顔は、端整で愛らしい。

真っ直ぐに腰上辺りまで伸びた少女の髪は、銀に近い金色でとても艶やかだ。

身長は160cmくらいだろうか。華奢な体付きだが、凛と立つ姿からか芯が強そうに見える。

また肌は雪のように白く、紺色の制服と鞆や黒色の革靴と良く似合っていた。

(わぁ……、ん？ あれっ？ もしかしてこの子が私……？)

そう思うと、私は少し手を振ってみた。

すると、鏡の中の少女も少し手を振った。

「うっ、動いた？ …… ってことは……」

(やっぱり、この子が私なんだっ！ 嬉しいけど、慣れるまで時間がかかりそうだな……)

「そういえば……」

私はふと二つの大きな疑問が湧いたので、執事さんに尋ねた。

「何故ベ……ヴェロニカの人々をこの世界に転生させているのですか？」

「そ、それは私にも分かりかねます」

(今執事さんが一瞬固まったような……)

執事さんは「聞かないで下さい」というオーラを大量放出していたので、深くは聞かないでおくことにし、もう一つの疑問を尋ねた。

「えっと、では私はこの後如何すれば良いのでしょうか？」

「藤瀬様にはセレスティアで生活して頂きます。それからこちらをどうぞ」

そう言つと、執事さんはいつの間にか手に持っていた麻袋を私に手渡した。

(えっ、何故に麻袋っ？ いやそれよりも……)

「これは何ですか？」

困惑しつつ尋ねると、執事さんは「これは放浪者セットです。中には50000イラナ、ライター5本が入っています」と答えた。

(ライター無駄に多いような……。それに放浪者セットってことはもしかして……)

「助かります。後、イラナって通貨のことですか？」

「はい。共通通貨です。それで暫くの間は生活出来ると思います。ところでそろそろ時間切れですが……」

そう言つて、執事さんは下を見た。

釣られて私も下を見ると、そこには白く光った床の上に立つ自分の足元が見えた。

「え、魔法陣？つてまだ聞きたいことが……！？」

そう言つと、魔法陣は更に強い光を発して私の視界を真っ白に塗り替えた。

途中、「行ってらっしゃいませ」という執事さんの声が聞こえた気がする。

私は一瞬浮遊感を感じた後、真っ直ぐに落下した。

## プロローグ third (後書き)

今回はちょっと堅苦しい説明編でした。

次回にはあらずじまで辿り着けるように頑張りますね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9728v/>

---

お菓子の妖精は異世界旅行中

2011年10月8日19時43分発行